ライフストーリー

ヒロさん

（総合政策部卒業）

互いの自分らしさを豊かさにするために、トランスジェンダーでバイセクシュアルの私が考えること

1．自己紹介

1- 1 セクシュアリティの自己紹介

私は総合政策学部出身で、関学の姉妹校出身です。中高大と関学ラインで、10 年間学んできました。

セクシュアリティとしては、現在 FtM トランスジェンダーで、バイセクシュアルという自認をしています。女性の体で生まれて、現在手術やホルモン注射等はしていません。でも小さい時からずっと「自分は女性じゃないし、この体は違う」みたいな感覚はありました。それに「どうやらトランスジェンダーという言葉があるらしい」ということを知ったのが大学生くらいでした。

この体は自分じゃないって思っていたから、自分の性別が男性か女性かということを、体をベースにして考えることができなかったです。体はどうやら女性らしいけど、自分は何なんやろうって思っていたから、性別という枠組みそのものを信じていませんでした。男性・女性って誰が決めるん？ どうやって決まるん？ とずっと思っていたし。私は自分の好きなものや嫌いなものを選ぶことができて、それは人から見て男っぽいものも女っぽいものもありました。「好き」や「嫌い」という感覚自体は自分にとってすごくリアルなのに、世の中ではそんな個人の感覚はかき消されて、男・女しかないみたいに見える。恋愛がすごくクローズアップされているようにも見える。家族もどうやら異性愛だけのようにも見える。

でもそれに対して「変や」ってずっと思っていました。自分というリアルな人間がここにいるのに、何でその自分のような存在が「いない」みたいに扱われて、誰かが決めたものがこんなに蔓延（まんえん）しているんやろうって、違和感を感じていました。なので、性別って不思議で、曖昧で、変だなあと思っていました。当たり前のように蔓延していることが、嫌だし、息苦しいなと思っていたんです。

人を恋愛的に好きになったこともあります。その相手は、自認は分からないけれども男の子であったり、女の子であったりしました。相手の性別に関わらずその人の性格や在り方が好きでしたし、好きという気持ちは一

緒でした。大きくなってからどうやらそれにも「バイセクシュアルって名前があるらしい」と知りました。

私は自分のことを説明する時は、「自分を女性だと思っていないし、男性として人から見られたり、自分を説明する時に男性って言ったりするほうがしっくりくる。なおかつ、恋愛では性別を重視していない」っていう言い方をするんです。私にとって相手の性別が何かは、恋愛での優先度がすごく低くて。それより相手と気が合うか、コミュニケーションがしっかり取れるかといった部分のほうが私にとっては大事なんです。そんな感覚を持っている、ということを人に言う時に、トランスジェンダーやバイセクシュアルという言葉を使っています。

1- 2 自認のきっかけ

私の幼稚園は男女別の制服があって、男の子が短パン、女の子がチェックの吊りスカートと決まっていました。私は短パンが良いって思っていたし、自然に僕って言ってたし、自分で「あれがいい！」って思うものがあったのに、身体の性別に自動的に当てはめられるという経験を度々していました。

当時私には男の子の友達が多くて、男の子に交じって一人スカートの制服でサッカーをしていました。私は彼らとフェアな友達だと思っていたんですが、一方で「なんで私だけ好きな服着られへんのかなぁ」とも思っていました。

セクシュアリティに違和感を持ったきっかけとして印象的なのは、４歳くらいの時にあったお遊戯会の練習ですね。男女ペアになってダンスを踊る劇のシーンがあって、その練習の時に「女の子はこっち、男の子はこっちに並んでね」って先生が前に立って言いました。「(列に並ぶのが)どっちが早いか競争やで！ スタート！」って先生が言っている時、私は「ん？」ってなっていました。友達はみんなあっち（男の子の列）にいてズボンをはいていて、私も本当はあっちに行きたいけれど、違うんだろうなって何となく分かっていたんです。先生に「ヒロちゃんこっちね」って女の子のところに連れて行かれて、「やっぱりこっちか」みたいな気持ち

になったのが、はっきり「自分は性別の自認が違うんやな」って思ったきっかけでしたね。

もう一つのバイセクシュアルを自認したのは小学校 1、2 年くらいです。その頃私は「どうやら女の子として生きていくらしい」と知りつつも、小学校に上がって制服がなくなったので「よっしゃ、好きな服を着れる！」と思ってズボンをはいて過ごしていました。そんな中、小 1 の時に男の子を好きになったんです。同じクラスですごく仲が良くて、その子のためにチョコレートを作ったこともありました。その後、小 2 に上がった私は心変わりをして、今度は女の子を好きになりました。すごく仲が良くて登下校も一緒で、「この子のことを大事にしたい」って思っていたし、その気持ちは 1 年生の時の男の子への気持ちと同じだったんです。でも私は、彼女にはチョコレートもあげられなかったし、周りの大人とか親とかにも、あの子が好きやって話もしなかったです。旅行のお土産をあげるのが精一杯でした。

1 - 3 何歳から教えるべきか

もうその当時から、世の中で同性同士がそういった恋愛的な関わりを持つことが大人や社会からどういう目で見られるのか、私は分かっていました。現在は講演活動もしているので、学校で大人の方に話すことも多いんですが、「幼稚園や小学校で性別の話をするのは早くないか？」と言われるんです。でも子どもは社会の中で生きているから、大人の視線も社会での扱われ方もとっくに知っているんです。なので、いろんな性の在り方を知ることも早ければ早いほどいいと思っています。

いろんな性別があることや、自分の性別がオリジナルでそれがすごく大事なものであり、自分らしいものなんだということを知ることは、大切な人権教育だって私は思っています。自分の性別に結びついていたり結びついていなかったりする、好きなものとか苦手なものとか、これがしっくりくるとかしっくりこないとか、そういうものをちゃんと自分で選んでいって、人からもそれに対して「変だ」とか言われないって、すごい安心感だと思うんですね。そういう安心感を、ちゃんと感じられたら、仮に他の人

が自分と違うものを好きでも、自分とその人が何かを大事に思っている気持ちは一緒だっていう感覚を持てる。それはとても大切なことだし、性別を通して話すことですごく伝えやすいものだと思っています。

だから小さい時から、何歳からとは言わずに、「性別も含めて本当にいろんな人がいて、その人のそのあり方っていうのが大事なんや」っていうのはみんな知っておくべきだと思っています。以上が私の性別の自己紹介の一部です。

2．大学生活

2- 1 学校生活

当時は自分自身のニーズが分からなくて、名前に違和感があることもあんまり気づいていなかったんですね。戸籍名が女性的なので、なんか嫌やなぁとは思っていたんですけど。それに、学生証などの証明書の名前が変えられるといったことも知らなかったです。今、通名で学生証を持っている人の話などを聞くと、「変えていいんや⁉」って感じです。「ヒロ」を名乗り始めたのが、卒業して 1、2 年後の 22 ～ 23 歳のときなんですね。自分自身も動きながら自分のことを知っていったって感じです。

当時、トイレはほとんど多機能トイレを使っていました。今は男子トイレを使っています。多機能トイレは車椅子の方をはじめ、絶対そこしか使えない方がいらっしゃると思うので、私は男子トイレを使えるならそちらを使おう、と思い、意識的に男子トイレを使っています。

そういうちょっとしたことも全部試しながらやってきました。男子トイレ使えるかな…使ってみよっかな…あ、いけたいけた！って。じゃあ、まあ次から使おっかなぁって感じです。通名を使うことも、「あ、いけたいけた。じゃあネットの会員登録をヒロにしてみようかな」ってじわじわ使っていきました。試したり揺れたり変えたりとかしながら…ですね。

性別は揺れるし、変わるし、変えていいし。心地いい状態ってどんどん変化していくと思うんです。趣味とかも変わるじゃないですか。2、3 歳ぐらいの時に好きなことを永遠に好きな人もいれば、そうじゃないことも

あるし。性別も一緒です。自分がしっくりくる性のあり方って変わっていいし、広がるというか、より自分のあり方が明確になることとか、拡大することとか、揺れていくことって自然なので。自分にとってそれをどういう風に表現するかは、時々の自分に添って決めていったらいいんじゃないかなと思ってます。

2- 2 カミングアウトのきっかけ

私は二十歳、大学３回生まで周囲に一切自分の性別のことは言っていませんでした。トランスジェンダーは見た目で他の人と違う風に見られやすいところはあるので、周りは知っていたかもしれませんが、それまで自発的にカミングアウトすることはありませんでした。

なぜ言い始めたかというと、就職活動がきっかけなんです。今はちょっと分からないんですけど、私が二十歳の頃ってまだまだジェンダーバイアスが強くて、就活用の化粧や服装などを教えるマナー研修みたいなのが女子学生限定であったりしたんです。「知るか〜〜!!」って思ってたんですけど（笑）。

でも就職活動をするとなった時は、いわゆるスタンダードな道しか、当時は知らなかったんです。学校で開かれるセミナーや合同説明会に行ったら、みんなブラックスーツで、髪も黒く染めて、女の子も化粧控えめにしてピチッとした髪型して、みたいな。大学ではあんなに自由だったのに、みんな枠にはまっていくんですよ。

その枠の一つにやはり、性別もありました。男性・女性のフォーマルな格好にはすごくジェンダーの視点がありますよね。当時周りにもそんなにしっかりカミングアウトしていなかったし、語る言葉も持っていなかったし、周囲からの目を考えたら、私は自分の自認に合わせて男性スーツを着るわけにはいかなかったんです。「セクシュアルマイノリティ」とか、「LGBT」って言葉も全然知らなかったので、言葉を知らない、自分を語れる言葉を持たない、自分が何者かも分からない状態でした。違和感だけがすごく強くて、けれど生きていかなければならない、という状況になった時に、「何を選ぶか」が問われました。このまま女性の枠で、社会に合わ

せて生きるのか。それとも、わからないなりにでも自分らしく生きるのか。その時に、「やっぱりこれ以上、自分が女性枠で生きるのは無理やなぁ」って思ったんです。

それでも就活を続けるために、女性用スーツを着ないといけない（と思い込んでいた）ので、その中でもパンツスーツでなるべく体のラインがでないやつだとか、ヒールじゃなくてローファーのようにフラットな靴を探しましたし、気持ちと折り合いをつけるために本当に試行錯誤しました。

履歴書を書くときにも戸籍名を書かないといけなくて、女性に丸をつけて、女子社員として見られながら、そこの会社の中に入っていくっていうことを実際にやってみたんですけど、本当に限界がきてしまって。日々を過ごしながらも気持ちの上では、就活どころか「死ぬかカミングアウトするかどっち？」というぐらいの勢いで追い詰められていきました。

女性として一応生きてきて、女性やら娘やら女友達として人から見られて関係性を作ってきたので、女性の「ふり」をするのをやめるのはそれらの関係性を一度全て手放すことと同義だと思っていました。それでも、友達や親や全部の関係が壊れたとしても、「私は女性としてもうこれ以上生きるのは無理だ」って思って、二十歳の時にカミングアウトしました。本当に生き残るために、望む望まないと言うよりも、カミングアウトしか道がなかったんです。

2- 3 誰にどうカムアウトしたか

初めは友人で、中高の友達からカミングアウトをし始めました。それまでは恋話（こいばな）になった時とかに「相手の性別は別にどっちでもいいと思ってるけどな〜」ぐらいに、しれっとなんでもない感じで言っていました。そうすると「なんかグローバルな人なんだね」などと言われたので、特に何も言わず、相手に印象を任せるような形で話題を流していました。でも、「グローバルとかそういうことじゃないから」みたいにきちんと話をし始めたのが、二十歳くらいです。

「私、本当に、自分のことを女性と思っていないんです。なおかつ、お付き合いする相手の性別も関係ないと、本当に思ってるんです」と話し始

めました。当時、「この自分で生きていくしかない」と思い、同時にいわゆる恋活というか、出会いの場所にも行っていたんです。そこで幸いなことにパートナーができて、当時のパートナーが戸籍上女性の方だったので、戸籍上は一応女性同士ということで、名実ともにセクシュアルマイノリティ…って言うのも変ですけど、説明がすごくしやすくなったんです。「今この女性の方とお付き合いしていて」という形で、友達や親にも話をしていきました。私は三人姉妹の真ん中なので姉と妹がいるんですけど、姉と妹と母には二十歳の時にカミングアウトして、それからはほぼフルオープンでしたね。

本当に死ぬかカミングアウトか、みたいな感じだったので、もう生きると決めた以上、隠す必要がなくなったという感じです。これでしか私は生きていかれへん、ありのままの自分でしか生きられへん以上は隠す意味がないと思って、そこからほぼフルオープンです。

初めの頃はカミングアウトするのも必死で下手くそでした。日常の中でそんな話題の流れでもない時に急にパッと言ったりしたし、相手からしても私との関係性が変わるから、びっくりさせた子もいただろうなって、ちょっと申し訳なかったなぁと今は思っています。

カミングアウトをして、それがきっかけだったわけではないかもしれないけど、結果的に疎遠になった子もいれば親しくなった子もいました。私はカミングアウトをした結果、セクシュアリティが原因でいじめられるとか嫌なこと言われるとか、そういう経験は一切なかったです。それはすごくラッキーというか、幸いなことだったなと思っています。

2- 4 カミングアウトを経ての変化

カミングアウトする前は自分のセクシュアリティを含めて、いろんなことを隠していたんですが、カミングアウトをしてからは人間関係に対してすごく真剣になりました。セクシュアリティって、その人がどう生きていくかとか、自分らしさって何かといった人の根本に関わる部分だと思うんです。

例えば、小さな頃からずっとどんな服が好きか、どんな髪型をするか、

どんな持ち物を持つか等もですし、恋話も、何気ない会話もそうですよね。例えば、休みの日誰と居たのかっていう会話でも「いや、パートナーと映画見に行っててさぁ」とか「ゲイの友達と飲んでてさ」って話は、カミングアウトをしていないとできない。日常生活のあらゆるところに、自分の性別の部分が関わってくるので、そこを抑えてると、嘘がいっぱい重なっていくんですね。

中学校の時が顕著だったんですけど、恋愛に興味ないです、みたいなキャラを作っていたんです。ボーイッシュキャラで、一匹オオカミです、みたいな感じで過ごしていましたね。そんな風にガチガチに設定を作らないとダメでした。特に私が中高生の頃は、恋話だったり、化粧とか芸能人とか部活の話だったり、いわゆるジェンダーが絡む話になることがよくあって。そういう場面になった時に話に入れないんです。そのため、話題を振られないように自分を作って、人ともあまり親しくしないでいようと思っていました。本当に本音から乗って入れない以上は、ある程度キャラクターを作らないと耐えられなかったんですね。

カミングアウトしてからは、そういうものを全部取っ払ったんで、生身で人とぶつかっていくという感じになりました。本当に自分のことを知ってほしいし、あなたのことを知りたいっていう関わり方をするようになって、これは私にとってはすごくいいことだと思っています。カミングアウトした時に「ずっと壁を作られてるような気がしてたけど、だから（セクシュアリティを隠してたから）やったんや」みたいなことをよく言われたので、やっぱり周りもどこか私を遠くに感じている部分があったんやなぁって思って。人間関係だったり自分の気持ちだったりに対して、すごく真剣に考えるようになりましたね。

2- 5 在学中の活動

当時お付き合いしていたパートナーがソーシャルアクションをするタイプだったので、私も在学当時から動いていました。学内で大学３回生の春くらいにカミングアウトし始めて、秋に総合政策学部では、リサーチフェアという研究発表会があるんですね。希望者が自分のテーマを持ってきて

研究発表をできるような場所があるんですけど、そこでセクシュアルマイノリティのことを話したりしていました。それと大学内の人権系の講座で当事者として話をさせてもらう活動などを、大学 3、4 年ぐらいからちょこちょこ始めていました。私のサバイブはそこもあるかなと思います。

自分の個人的なカミングアウトに加えて、やっぱり自分ひとりがいくらカミングアウトしても、世の中の視線が変わらないと私の生きづらさも変わらない。私を含め、周りにいるだろう、言いたいけど言えてない子たちのためにも環境を変えないと、本当にはサバイブしていけないと思っていたので、環境を変えなきゃっていうのはすごい思っていました。だからカミングアウト自体が活動というか、「ここに居るんだ！」って叫び続けるみたいなことはずっとしていましたね。1 回の授業の中の 15 分とかですけどね。しゃべりながら自分のことを知っていくとか、当時こんな風に自分は思ってたんや、みたいなことも感じながら、卒業してからも講演活動を続けていました。

セクシュアルマイノリティの生きづらさを表すのに、当時は私自身がものすごいリアルなサンプルだったんです。足も震えるし声も震えるし、セクシュアリティを明かして前に立って話すことがどれだけ怖いかが、私の姿を見たらわかるんですよ。私は「めっちゃ怖いです。ここに立ってるの」みたいな自分の気持ちを正直にそのまま言っていましたし…。学校生活の中で嘘をつきながら暮らしていたこととか、ちょっとしたホモネタをクラスで笑うこととかに、私はどれだけ苛まれてきたのかということが、今ここに立ってすごくわかるっていう話をリアルにしていたので、生きるメッセンジャーみたいなことを当時はしていました。でもそれは、あまりやるもんじゃないなって今は思います。当事者の後輩の人たちには「そんな身を切るようなことはしなくて良いです」って言いたい（笑）。ただでさえ生きるのは大変だから、自分の人生を大事にしてほしいです。

そんな身を挺（てい）して活動するようなことを後輩の人たちにはさせないように、世の中を変えたいと思っています。当事者の人に会った人って、変わっていったりするんですよ。私はこれまでも学校の先生とか、それこそ大学とかの授業で学生さんとかに沢山お話をさせてもらってきました。やっぱ

り「当事者」だと相手が思うような人に出会うと、すごく印象が変わるみたいです。当事者と出会う前は「テレビの中の人」とか、「変わった人」とか、どっかにそんなイメージがあって、でも本当にその辺にいる普通の人たちなんだっていうこととか、隣に居るんだってこととかが分かってもらえるんですね。そうやって出会うと、「新聞の中でセクシュアルマイノリティの記事を見た時とかに、ヒロさんの顔が浮かびます」って言われたこともあるんです。そういう出会いが人を変えていくんだなって思うので、私は活動はずっと続けるつもりです。

3．就職活動

3- 1 就活とアイデンティティ

二十歳くらいでカミングアウトするまでは、セクシュアルマイノリティとして生きるというライフプランを立てていなかったんです。良いのか悪いのか、いわゆる優等生でずっと生きてきたんですね。学校の成績もそれなりに良くて、外向きにずっとキャラメイキングをして、「国際公務員になって、難民の子どもを養子にして暮らしていくよ」みたいな話をしていました。そういう（日本という国家の）枠に縛られない世界で生きるんだ、みたいな話を周りにはしていたんですけど、セクシュアリティが生きづらさの根本だって気付いてカミングアウトし始めたら、それは嘘だったって気づいたんです。

私が本当に欲しかったのは枠にとらわれない、自分らしく生きるための生き方であって、手段としてそういうものを求めていただけだったんだというのに気づいたことで、アイデンティティが崩壊してしまいました。将来像も見失って、就活で何を話していいかが分からなくなっちゃったんです。それまでは興味や関心に沿ってキャリアプランニングや自己分析の講座を友達としていたんですが、本当の自分に気づいて今までやってきたことに一切興味がなくなってしまったんです。興味関心も性別も何もかもわからなくなって、私は就職先が決まらないまま卒業しました。

大学４年の７月くらいまで就活も頑張っていたんですけど、ある日突

然家を出られなくなってしまって断念しました。そこからは自分のセクシュアリティを落ち着かせていくというか、自分が何者かをまず知っていくことを目指しました。一回アイデンティティを立て直そうと思い、セクシュアリティのことについて勉強するとか、同じような人に会いにいくみたいなことをそこから２年くらいかな、ずっとやってた気がします。大変やったなぁ。

3- 2 就活と戸籍上の性・名前

パンツスーツでしたけど、学生時代は私は戸籍名を使い、性別欄は女性に丸をつけて、女性として就活していました。戸籍を変えるのにも要件がいりますが、私は戸籍変更の要件を満たしていないんです。今は戸籍は変えなくてもいいかなと思っていますが、不便なこともあります。

就活だと、トランスジェンダーであっても自分の本来の性ではなく戸籍の性に合わせて書類を書かないと、虚偽になってしまうんです。虚偽の申告では、会社は採用ができないという背景があります。それでも就職活動をしようとすると、はじめにカミングアウトせざるを得ない場合もあります。すでにホルモン注射をしていて外見は本来の性に近いけど戸籍は変わっていない、みたいなケースで、最終面接を通った後に話をして、人事とか上の人だけ知っている状態で自分の望む性で働いている、みたいな人もいます。ただやっぱり、カミングアウトして、それで落とされてしまうケースももちろんあるので、会社には何も話さずに戸籍の性で働いている人も多いです。本来の性で働くっていうのは権利だと思うので、変な話なんですけどね。

本当に、本当にそこで働きたいと思うんだったら、そして自分の性を隠して働きたくないと思ったら、入ってから言ったほうがいいと個人的には思います。やっぱり落とされやすいというか、本当にあってはいけないけれど、仮に、A さんと B さんがいて、A さんは異性愛者でシスジェンダー、B さんがトランスジェンダーだと会社が分かっている状態で、その２人のどちらを採用するか悩んだら、たぶん A さんが採られる。B さんの方は、入ってからその会社側がいろいろ配慮とか整備するっていうコストを考え

られてしまって、B さんを採らない選択をされることは、残念ながらやっぱりまだあると思うんです。就活をしていて、もうほんまにここ入りたいなってなったら、入ってから相談したほうがいいかなと思います。もし相談してあかんかったらその時にそこは辞めたらいいと思います。

それと、履歴書はインターネットで性別欄のない物をダウンロードして使えます。履歴書を「必須でこれ使いなさい」ってそこまで指定するところってあまりないと思うんですけど、そういった要件を出しているところ以外は、履歴書は基本的には自分で用意して自分で書くものなので。性別欄のない履歴書も、「性別欄　無し　履歴書」とかで調べたら出ます。

名前に関しては、通名（戸籍名ではない、普段名乗っている名前）はさすがに厳しいかも。通名を使うなら内部の人としっかり話す、みたいなことはあったほうがいいかなと思います。あとは入った後に、人事の人とか上の人と話して「通名で働きたい」って言うことは可能だと思います。私も実際やっているんですけど、仕事で使っている名刺や名札などを通名にしてもらって働くことは可能だと思います。仕事の場で、自分がどこまでなら許容できるかを考えてみるのは大切かなと思います。

3- 3 いろんな就活の仕方

学校だったらキャリアセンターですかね、そこで相談しながら考えていくのも一つかなと思います。あんまり就活の方法に縛られないほうがいいかなあ。いわゆる就活というか、企業の説明会に行き、そこから履歴書を書いて１次２次３次、集団面接して個人面接して、みたいな流れはスタンダードかなと思いますが、今は副業時代とも言われているし、就活の仕方も多様化しています。例えば企業訪問に行ってみるとか、バイトしてみるとか、インターンに行ってみるとか、興味のある業界や会社のイベントに行ってみるとか、入り方は結構色々あると思うんですよ。就活の仕方でつまずくのであれば、他にやり方はないか、色々探ってみてもいいかもしれません。

会社によってはインターンもありますし、はじめからセクシュアリティについて説明しながら人柄をわかってもらって、どういう風に働きたいか

も含めて関係性を作ってしまうっていうのも一つだと思っています。インターンとかで人を見てもらって、「あなたと働きたい」って思ってもらうのが一番だと思う。

幸いなことに、現在私は大学時代の知り合いのところで呼んでもらって働いています。つながりを沢山持っておいて、仕事探してますって言い続ける（笑）。口コミというか、信頼できる人からの紹介などもあるかもしれないので、諦めずに自分に合った仕事探しができたらなと思いますね。

3-4 就活とカミングアウト

セクシュアリティももちろん大事だけれど、仕事の場面では社員と会社とか、部下と上司という立場なので、「仕事をちゃんとします」っていうことはやっぱり一番伝えるべきことかなと思います。仕事について「こういうことができて、こういう部分は難しいけど頑張りたい」っていうことを伝えた上で、「ちゃんと働いていきたいと思っているけれど、トイレのことだったり着替えの場所だったり、働くにあたって関わってくるようなこういう部分が困るので、こういう風に配慮してもらえるとありがたいです」みたいな感じで話せたらもっといいですよね。

会社は家庭とか友達関係じゃないから、「困ってんねん、わかってくれ」だけやったら、向こうも困ってしまうかなと思います。社会人として、「ここはできて、ここはこういう風に困っているからこういう風にやってもらえるかどうか、できるかどうか」を伝える。そして相手も自分も、「できないにしても、どこまでならできるのか」を相互に話しながら明確にしていく。それは大事なことかなあと思います。

会社でどこまでセクシュアリティについて話すかも考えたらいいと思います。別に事細かに言わなくても、例えば上司だけ知っといてもらったらいいやとか、同僚のこの人だけ知ってたらちょっと楽かなとか、どこまでどういう風に話すかも決めたらいいかなと思います。

諦めないでほしいなと思うんです。自分の働きたい働き方とかを。割り切ってやっていける人なら全然いいと思うんですけど、やっぱり働く上で我慢できひんって感じる部分があるなら、なんとかやっていける道を探し

て、マッチングできる会社や働き方を探すことが大切だと思うんです。諦めずに探していこう！何らかの方法はあるから！って思います。

4．就職後

4- 1 現在の就職先

私は現在いくつか仕事をしており、主に子どもの支援をするNPOで働いています。他には子どもに限らず、セクシュアリティのことも含めて困っている人たちの相談業務等をしています。社会的弱者にさせられているような人たちと生きたいとずっと思っているので、そんな人たちと共に歩むようなお仕事をしたり、活動をしたりしています。講演活動も関わっていて、最初は15分だけ話をさせてもらうとかでしたが、今は大学や中高大の学校など色々な場所で関西を中心に、セクシュアリティを切り口にした人権講演をしています。

そういう活動を通して、いろんな人がいるし、それはあなただったり私であったりするし、その違い方っていうのはどんな違いがあっても、誰にもこれが良くてこれはあかんみたいなのは決められる話ではなくて、あなたはあなたでいいし、あの人はあの人でいいんやっていう話をずっとしています。

これも私にとってはサバイブの一つですね。活動を通じて、生きる環境を変えていくことも大きいし、メッセージを繰り返すことで自分自身にも言っているような感じです。私は本当に、どんな人がどんな自分であってもいいんだっていうメッセージは世の中にあまねく広まって欲しいと思っていて。誰も孤立させない社会にしたいし、孤立したくないと思っています。

5．その他

5- 1 カミングアウトの工夫

カミングアウトをする時は、初めに「今から私にとってすごく大事なこ

とを話そうとしているんだけれど、あなたのことを信頼しているし、あなたのことがすごく大事で関係をもっとよくしたいと思っているから、この話をする」っていう目的を話してたかもしれません。打ち明けることで相手を困らせたいわけでもなければ、距離を取りたいわけでもないし、なおかつ「話しても話さなくても、私は私でずっと変わらない存在なんだ」っていうことを話して安心してもらいたくって。

だからまず、自分は仲良くなりたいと思っているし、関係性を変えたくないと思っているから話すんだよっていうこと、そして話す前も、話した後も、それを言ってなかっただけで私はずっと同じ存在で変わらないよっていうことを伝えます。

初めはセクシュアリティを言うことで精一杯だったんで、最近になってようやく、そんな説明をするようになりました。前置きを話した上で、「でね、私は体と心の性別が違っていてね」みたいに話します。相手の方も1回話しただけじゃほぼほぼ分かんないんですよね。自分でさえ自分の性を何年もかかってやっと理解して、話せるようになってきたんだから、カミングアウトは1回じゃ終わらないんです。言ったことはあくまできっかけで、そこからまたオープンな自分として、関係性をもう一回、一から作っていくぐらいの気持ちですね。

でもカミングアウトしてもね、やっぱり友達とか親とかからホモネタとか出るんですよね。「どういう部分で私(ヒロ)が気になる、傷ついている」ってことも相手はわからないので、会話の中でパッと気になる言葉が出た時とかに「こういう風なこと言われたらちょっとしんどいからやめてほしいなぁ」みたいなんを都度都度言ってますね。言えない時も多いけど。

ほかにも、旅行などで出かける時、私はトイレやお風呂に他の人と同じように（女性の場所に）入れないので、例えば温泉に行こうってなった時に「あ、私入られへんから外で待っとくな」みたいなことをちゃんと話しておくとか。そんなことが段々積み重なってくると、友達や家族もじわじわ分かってきてくれるんですよね。

今では家族旅行に行く時は、出先とかで家族がトイレをパッと見て、「あそこ車椅子用トイレあるから行っておいで」とか言ってくれます。宿泊先

も、私の部屋に個室のお風呂が付いているかどうかとか見てくれるし、ありがたいです。でもそういう振る舞いを、自発的にやってくれるほどに私の状況を理解してもらうことは本当に時間がめっちゃかかりますし、関係性を続けたいと思う相手であれば、いい意味であまり期待せずにカミングアウトをし続けていくことが大事かなあと思います。

5- 2 学生時代の自分へ

学生時代の自分には、「悲観しなくても大丈夫」ってことは言ってあげたいですね。当時は就活はじめ、すごく追い詰められていたんですよ。性別も自分でもよくわからないし、これで本当に生きていけるのかずっと怖かったから。本当に自分らしく生きたいと思うなら、自分を受け入れてくれる場所や人は必ずいると今ならわかります。人との繋(つな)がりを大切にして、生きていきたい方向などを他の人と分かち合いながら過ごしていたら、必ず大丈夫だから、一人で悩むなよ〜ってことは言いたいですね。

5- 3 今これで生きている理由

自分のセクシュアリティを受容できない…というか、ありのままで生きるのは難しい感覚は今もあると思っています。この世の中で生きていると、やっぱり残念ながらまだ異性愛者ベース、体と心の性別が一致している人ベースだし、恋愛はするものだしっていう空気がすごく自然に流れている中で、いろんな性別を生きる人はいないものにされているような雰囲気もあります。同性婚や性別移行だけでなく、夫婦別姓でさえも男女セットで、片方が片方に合わせざるを得ない制度になっていますよね。そんな世の中で生きていると、否が応でも「自分が存在しない」ような負のメッセージを受けちゃうと思うんです。そこに 1 人だけで立ち向かうのはすっごいエネルギーがいるし、どんなに自分自身を信じている人であっても、ふとした時に街中で不審な目で見られる時の視線の冷たさみたいなものに対して、すごく怯(おび)えるような気持ちはあると思うんです。

それをどうやって乗り越えるかっていったら「それでいい」って言ってくれてきた人たちの存在とか、既にセクシュアリティを受けいれた人や自

分の性別を生きている仲間や先輩の背中を見ることとかだと思うんです。人ですね。人に支えられながら、私は私でいいんだっていうことを学んでいく。そんな出会いのおかげで私は今これで生きているなって思います。

6．大学生へのメッセージ

6-1 当事者へのメッセージ

そんな大層なことは言えないけど、孤立だけは絶対しないで欲しいなって思っています。サークルでも、友達でもいいから、自分が自分でおっていいんやって思える、できるだけ沢山、できるだけ多様な場所とつながって、一人にならないことが大事です。セクシュアリティに限る話じゃないですけど、関学ならランチ会やサークルもあります。

すごくよくあるのがホモネタに出合うことだと思うんですね。ホモネタなどのハラスメントに出合った時も、嫌だって言っていいです。いいですっていうか、それはもう本当に、人権なので。あまりにひどいとか、しんどいみたいな場合は、学校の学生支援相談室に相談して、どういう風に対応するのかを相談してもいいと思います。気持ちがしんどくなってしまったら、大学のカウンセリングを使うとか、外部のセクシュアリティフリーの電話相談や相談機関、ピアサポートグループを使うとか、色々使って自分の気持ちや生活を守るというのも、長く良いキャンパスライフを過ごすには大事だと思います。そういうリソースを色々と知っておくこと。知らなければそういう情報がまとまっているような人権教育研究室みたいなところに聞きに行くこと。生きていくには一定工夫がいると思うので。

結構前なんですけど、関学の卒業生で集まったことがあるんです。セクシュアルマイノリティの知り合い伝いで、ごくごくクローズな集まりだったんですけど。関学の学風でもあるかもしれませんが、みんな Mastery for service というか、関学生であるというアイデンティティがどこかにある人たちが多い印象でした。少なくとも私個人としては後輩を助けたい気持ちってすごくあるんです。繋がったり頼ったり頼られたり、居場所を作ったりってことを私は後輩のためにどんどんしたいと思っています。困った

らとりあえず周辺の先輩を頼り～！ 特にこのストーリーブックを作ってる人らを頼り～！って思いますね。

とはいえ頼りながら自分が学内でサバイブするって言っても、やっぱりニーズも方法も千差万別だと思うんですよ。例えばトランスの子だったら「学生証の名前変えたい」とか「望むトイレ使いたい」とか「好きな服着たい」とか、「部活でこういう風に動きたい」とか。個々のニーズってものがあると思うんですけど、サバイブをするためには自分のニーズはやっぱり知っておかないといけないと思うので、自分がどういう風に困ってるか、自分の理想は何かは丁寧に考えていったらいいと思います。

でも一人で考えるのは大変なので、このブックに関わってるような人権教育研究室とか、ランチ会とかでいろんな人と繋がりながら、自分がどういう風にサバイブしていきたいのか、どういう部分の困りごとを解決したいのかっていうのをしっかり明確にして、解決策を一緒に考えてもらうことも一つです。

一人の動きっていうのは、あなた一人の動きだけではなくて、後に続く人たちの道にもなります。事例が 1 個あるのは本当にでかい。だから例えば名前を変えるにしても、自分が学生証の名前を変えることは後の人の光になります。望むトイレを使うとかも、セクシュアリティだけの話じゃないと思うんです。例えば難病とか、目に見えない困りごとのある人たちも含めてみんなが使いやすいキャンパスになっていくための工夫は、全部マイノリティの声から生まれることですよね。我々マイノリティはパイオニアなんですよ。頑張ろう。…頑張ろうやけど、その前に、自分がしんどかったら意味がないので、何より幸福でいてくださいと、私は後輩の人たちに本当に思っています。

6- 2 周りの人へのメッセージ

セクシュアルマイノリティとか言われてる人だけの問題じゃないんですよね。例えば、障害を持っている人は「障害者」って言われているけれど、その人のあり方を受け入れられない社会の方に問題＝障害があるという考え方を社会モデルと言いますね。だから、セクシュアルマイノリティの人

がいてもそれは少数派なだけであって、その少数派の人たちの困りごととか、その人達を困らせてしまう状況に置いてるのはやっぱり社会であり、マジョリティ。その中で「普通」に暮らせる立場にある人の認識とか考えが変わっていかないと世の中は変わらないですよね。

セクシュアルマイノリティって言われている人たちは、どこかにいる人たちだけじゃなくって、あなたの友達であり家族であり、大事な隣にいる人だったりするんですよね。だから人ごとじゃないんですよ。自分はその大事な人たちと、どうやって仲良く一緒に暮らしていけるかを考えることだから。

セクシュアリティってすごく揺らいだり変わったりする可能性があるから、自分自身が明日運命の同性の人に会って同性愛者になるかもしれないし、性別に違和感を持って性別を変えたくなるのが 60 歳、70 歳かもしれないし。本当にいろんな人がいて、それは自分かもしれなくて、友達や家族かもしれなくて。だから何て言うのかな、人ごとにしないこと。

自分自身のセクシュアリティのあり方とか、自分の友達のことだっていうことを考えながら興味関心を持って「性別って何なんやろう」「どうすればいろんな人がそのままで生きていけるんやろう」ってことを、自分の生きやすさのためにもぜひ知ってほしいと思っています。

もしかしたらね、性別に限らず、今すぐにでも人と違う自分になってしまうことも、あると思うんですよ。だからどんな自分であっても、あるいは自分の大事な人がどんなその人であっても、世の中で困らずに生きていけるために、少なくともキャンパス内では困らずに生活していけるために何ができるのかを考えること。そういう人達に厳しい視線を向ける、「自分とは違うんだ」って線を引くんじゃなくって、知っていこうとすること、共に歩もうとすることっていうのはすごく大事だと思います。だからこれは全ての人のための冊子であり、全員が知るべきことだと思っています。

6- 3 カミングアウトをされたら

カミングアウトをされたら、まずは決めつけないことですね。私の観点ですけど、友人にカミングアウトする場合は少なくとも「お前のことを困

らしてやろう」なんて一ミリも思ってない（笑）。仲良くしたいし、もっといろんな話がしたい、自分のことをわかってほしい、もっと深い友人になりたい、って思って話をしてるから、カミングアウトは信頼の証の一つでもあるんです。

カミングアウトに対しては、「（言ってくれて）ありがとう」って言ってくれたら私はうれしい。その上で、人はみんなバラバラでケースバイケースだから、わからないことなんてあって当然。だから「何に困ってるかわからへんから、例えばどんなことで困ってるか教えてほしい」とか、「どういう風に接したらいい？」とか尋ねてほしい。例えば相手がトランスジェンダーの子やったら、「名前はそのままでいい？」とか、「なんて呼んだらいい？」とか、「言われて嫌なことある？」とか、そういうことを尋ねて相手のことを知ろうとしてほしいなと思います。

驚いて引いてしまってそのままにするんじゃなくって、ちゃんと尋ねて、答えて、っていうコミュニケーションをとっていくことは友達として自然ですよね。だから、分からないことは一個一個、一緒に考えて、明らかにしながら関係を作ってほしい。でも何より、カミングアウトする前も後もその人はその人だから、変わらず自然に接すること。それが一番力になるなあと私は思います。

逆に絶対やったらあかんのは、アウティングです。アウティングというのは、人から聞いたセクシュアリティをその人の許可なく勝手に言うことです。いわゆる「バラす」っていうこと。アウティングはね、一橋大学の事例ですごく悲しい事件もあったんです。特定の人にカミングアウトをした大学院生の子が、他の人も入ってるグループラインで、セクシュアリティのことをばらされてしまって、自死したっていう事件が実際あって…。

アウティングというのは本当に側にあるし、すごく身近やけれど、取り返しがつかないんですよね。言っちゃったことって広まったり、コントロールができなくなったりしてしまうので。打ち明けてくれたことを他者に勝手に言わない、アウティングをしないっていうのは一番大事かなと思います。

とはいえ、例えば打ち明けられたことに対して自分が動揺したり困って

しまったりして、受け入れなきゃって思うけどできないとか、どうしても自分の中にフォビア（嫌悪）があって気持ち悪いと思うなど、困ってしまうっていうことがあれば、それは自分の悩みになります。なので、もちろん相手の詳細な情報は伏せて、学校の相談室とかカウンセリングルームとか使いながら自分の悩みとして相談したらいいと思う。

例えばカミングアウトしてくれた子に「ちょっと一人じゃ抱え切られへんから、この人に相談してもいいか」と確認を取ってみたりとか。とにかくアウティング以外の方法を探りつつ、自分の悩みとして扱うことが大事かなと思う。

6-4 全体へのメッセージ

他に周囲の人にできることとして私が最近推してるのが、ホモネタに乗らないこと。ホモネタに限らずなんですけどね、世の中、いろんな差別的な発言だったり、誰か特定の人とか、特定の性質に対して笑いにしたり、相手を傷つけたりする話ってネタ的に出ちゃいやすいと思うんですよね。でもそういうものに対して、賛同していない意思を示すために話に乗らずに流すこと。その話題を「へー」って膨らませずに、「ふーん。でさー」って別の話題にするとか。

本当はね、「そんなん言うなや」って言えたら一番いいけれど、人間関係の中では難しい時があるじゃないですか。だからそういう話題が出ても乗らないとか、「自分はそうは思わへんけどなあ」みたいなんで、うっすらと自分の主張をするというか。

日常の会話とか、動作の中からだんだん差別を容認しない空気はできていくと思うから、ぜひそんな文化・風土っていうのを作ってほしいなと思っています。総政出身としては Think Globally, Act Locally を強く呼びかけたい(笑)。例えばレインボーウィークをやっていたら、「フライヤーちょっと読んでみよっかな」とか、一瞬の機会を捉えて少しずつ動いていくことはできる。その波が段々広がっていったら、気づけば全体の文化・風土っていうのは変わっていくと思うので。そして変わっていった先にあるマイノリティに優しい社会っていうのは、全員に優しい社会だと思っています。

出来ることからみんなの生きやすい社会を作っていってほしいし、私は、関学はそれが出来ると思っているので。Mastery for Service の大学だから（笑）。だからぜひ、日本中の、と言わず、世界中の大学の人権レベルを引っ張っていくくらいの勢いで一緒に頑張りたい（笑）。関学なら出来るぞ〜!!

みんなに優しい大学であってほしい。本当に。母校には。…と思っています。